

講 演

## 創立者と学生—女性教育の視点から—

佃 操

### 1. はじめに

こんにちは。今日は大変緊張しておりますが、大勢の皆様にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

これからお話をいたします事は、さきほどご紹介にありましたように、私は創価大学開学前にはせ参じさせて頂きまして、幸せにも31年間の創価大学のキャンパスの中で先生と共に、学生の皆さんと共に、職員の皆さんと共に、ささやかながら建設の一端を担わせて頂きました、感謝の思いで一杯でございます。

今日は女子教育ということがテーマでございますので、創価女子短期大学に視点をあてて、お話をさせて頂こうと思っております。

### 2. 設立構想

御存知の通り、創価女子短期大学は、関西にできる予定だったわけですね。創立者池田先生の理想の女子教育ということで、関西女子高等学校、創価女子短期大学とこのように一貫教育として開かれることになっておりましたけれども、諸般の事情で創価大学の地に併設され、創価大学15周年記念事業として開学を致しました。

常々創立者は「天の半分は女性である。この半分の女性が知恵と力を持てば、戦争は起こらない」。そして「人の不幸の上に自分の幸福を築いてはいけない」とおっしゃっておられます。この平和への創立精神の女子教育が関西の創価女子高校で実践されました。私ども創価女子短期大学がその基盤の上に、ここ八王子の地に産声を上げました。1985年4月9日に第一回の入学式が行われました。起工式は前年の4月10日に行われております。ここには創立者池田先生がご出席をしてくだり盛大に行われました。

さて、話は現在に戻りますけれども、おかげさまで創価女子短期大学は開学18年目を迎えました。しかし今、この短期大学がおかれている環境といいますのは、大変に厳しくなっています。私の学生部長時代から、18歳人口の減少、女性の高学歴化の波を受け最早「短大は潰れる」と、世間の話題でございまして、いち早く改組転換をしたところがあります。

創価女子短期大学はどうするのか、と人心が揺れたことがございました。その時、創立者は「危機こそチャンスだよ」このように言うてくださいました。それをお聞きして、私たちは何としても創価女子短期大学だけは他の短大がなくなればなくなるほど女子教育として光輝いていく短大にしなければならない、絶対に女子教育は必要であると確信をもったしだいです。

そのような時を経まして、何と今日はこの少子化のさなか、大変な志願の方々が集ってくださっております。これを見ましても、短大2年間の女子教育の成果というものが素晴らしいと、

自信を持っております。

創立者はかねて、創価女子短期大学ができましたときに、「すばらしい通訳が短大から出てもらいたいね。出るね」と話され、期待をしてくださっておりました。従いまして、<sup>なま</sup>生のアメリカで語学研修を行う、このことを視野に入れ、開学の一期生の二年目から、アメリカの語学研修一ヵ月を開催致しました。いち早く、創価大学にも先駆けて国際性豊かな女性を育てよう、そう思って始めました。1990年池田先生は、アメリカ指導に行かれました。ロサンゼルス<sup>ス</sup>のアメリカ創価大学分校に一ヵ月滞在をされ、その時に重なるように創価女子短期大学5期生の春季語学研修がございまして、そこで、創立者池田先生が自ら、毎日のように教育をしてくださったのです。出発をする前から「この時期は飛行機が揺れるけれども大丈夫だから。安心していらっしゃい。ロスで待ってるよ」と、このように言ってお下され、学生は胸躍らせて到着いたしました。ちょうど到着した時は、すでに会合の始まる時間でしたけれども、先生は「短大生が来る。短大生が来る」と言ってお下されたそうです。そして彼女たちが着くとすぐに、「若いんだから、若い人はどんなに疲れていても疲れたような顔をしちゃいけないよ」。こうマイクを通して激励してくださったのです。先生は、次から次へと毎日試験をしてくださしました。「英語ができない人はここから帰るなさい。すぐ帰るんだ」と言われ、皆、目をパチクリさせるような状態の中だったそうです。先生は徹底して教育をしてお下さいました。「人生の生き方を教えるよ」、そうおっしゃって指導してくださいました。

さて、開学2年目で初の卒業生を送り出すことになりました。今でこそ1/4ぐらいは編入や進学、留学という学生がおりますが、その当時は100%就職でした。はじめてお祝儀相場でとってくださった1期生だったわけですが、しかし企業の方々が「短大生がここまでやるのか」というくらい、卒業生は非常に素晴らしい仕事をしてくれました。たとえば、大手の生保会社を自分で自己開拓をしたという人は、不遇な部署に配属されました。そこで引継ぎも何もないままでしたが、秘書実務で学んだ実力を発揮し、ダンボールに入っていた書類を全て整理して、綺麗にファイリングをしたのです。そして自分から仕事を率先して明るく爽やかに元気に、一番陽の当る職場にしようと、頑張ってくれました。そのうち「一体これは誰がやったんだ」と上司に評価され、そして彼女の職場が女性の憧れの職場になって、一番女子職員が多くなった、こういうようなお仕事をした人がおまして、ひとえに後輩の道を開いてくれました。女性の代表取締役も、はじめは非常に厳しい目で見ておりましたけれども、「あなたの後輩ならばとつてもいいわ」と言っておはじめて創価女子短期大学にご挨拶にいらっしゃった。こういうこともございました。

また、一流企業に入れて頂いて、社長から大変にかわいがられ、他社の社長からも信用され、そして秘書の仕事を見事にやり終えた、そういう先輩もおります。このように多くの先輩達が道を開いてくれ、今日に到りました。それではどのようにして、たった二年間でここまで教育をされたのか。この淵源をお話しさせていただきたいと思います。

### 3. 開学準備

1984年4月10日の短大の起工式には先生がお出席になって下さいました。そして先生は起工式が終るやいなや次から次へご来学をしてくださいまして、これからは短大だ、こういうような凄い勢いでした。起工式が終わってすぐ、先生は創価女子短期大学の建学の精神である三指針を下さいました。そして、いよいよ21世紀を視野に入れた学生募集が開始されました。もちろん先生は全面的に応援してくださったわけです。すぐに『聖教新聞』1面に短大就任予定者

の座談会を掲載してくださいました。また創立者は、起工式の時に創価高校から参加をしていた女子生徒の方々に、「短大に来るんだよ」と言ってくださったんです。その子たちは四大しか考えてなかったわけです。ところが本人は先生がおっしゃったんで、「はい」と言って一期生になった。このように、創立者が自ら学生募集をして下さいました。一つひとつ創立者に見守っていただく中で、創価女子短期大学の準備が進んでいきました。槌音のひびく中で、どんどん募集が始まり、1985年3月25日、新校舎の落成ということになりました。

#### 4. 新校舎落成

その日、先生は創価大学の卒業式を終えられて、すぐ短大に来て下さいました。そしてレインボー階段のちょうど入口のところにポールを置いて、そこでテープカットをして下さいました。その時には4月の短大入学予定者も20名くらい招待をしておりました。その中に代表を入れて頂こうと決めていたんです。でも先生が「まだ早い」とおっしゃいまして、全部教員の先生方でテープカットをし、そして校舎の中に勢いよく入っていかれました。先生はあらゆるところを、全部見て下さいました。「立派な短大だね。壁の色もいいね」とおっしゃられながら、教室の椅子に座られて「居眠りができないね」ともいわれました。先生はとにかく「居眠りをするような講義は駄目だ」、そして「予備校の講義は面白いよ。だから自然にスッと入っていくような講義じゃなきゃいけない」とさかんにおっしゃいました。そして「あちらの壁に絵をかけなさい」とか「こちらの廊下に絵をかけなさい」といったご指示を下さいました。管理人室や、保健室までも見て下さいました。そしてこの日に来ていた短大入学予定者にも「全部トップだね」と激励して下さいました。

「体育館（白鳥体育館）もすぐテープカットしよう」とご提案してくださり、それが終わるとすぐ中に入られました。先生は「素晴らしい。申し分ない。これだけの体育館はどこにもないよ」そうおっしゃって、「満足ですね。いいですね」って随行の教員の先生方におっしゃっておられました。本当に先生は大変なお喜びようでございました。

先生は外も見回られて「環境が大事だ」といわれ、「外に紅梅、白梅を植えよう」というようなご配慮もして下さいました。短大にはプリンセスホールという食堂がございます。つきあたりが円形の窓になっておりますが、そこからみえる庭園の紅梅白梅はこのときのご提案によるものです。さらに「紅梅、白梅、桐、ザクロ、桃、桜全部植えよう」、そして「ザクロは種が団結しているからね。仲がいいって表しているいいよ」とおっしゃいました。また「この窓の下には、雪柳がいいね」と。こうして、先生は全部環境を整えて下さいました。

「記念植樹を入学式にやろう」とおっしゃりながら、校舎内の場所に「命名をしなさい」ともいわれました。そこで各種の施設に皆で名前を付けたんです。一例を上げますと47段のあの短大の正面階段には「レインボー階段」というアイデアが出まして、この「レインボー階段」は、開学の当初初代開学長がいつも2階の窓から登校して来る学生に激励の声をかけておりました。遅刻してくる学生は必死になって駆け上がるんですけど、いつもそこは心臓破りの階段とか、健康のバロメーターとかいっておりました。男子学生にとっては大変敷居の高い階段のようで、おかげさまで男子学生は入ってこれない。こういうことになっておまして、安心して女子教育を行うことができました。また、レインボー階段を上った校舎ぞいの通りを、フランスのシャンゼリゼのようにここを素晴らしい女子学生が行き交うようにと思い「シャンゼリゼ通り」と名付けさせていただきました。

## 5. 開学にあたって

こうして準備が整っていく中で、いよいよ入学式をどうするか、学長以下私たちは毎日どうしようかと青くなっておりましたところに、先生は何度も何度もいらして頂いて、「入学式はどうなっているのか」等々、聞いてくださいました。そういう状態の中で「とにかくどこにもないものにするんだ。スカッと爽やかに、そういう入学式にしていこう」とおっしゃるんです。4大生と短大生をどうやって見分けるのかということも問題になり、それでは制服だ、というのでデザイナーの方に制服のデザインをおこしても頂きました。しかし、先生は「いろいろ考えたけれどこれからは制服の時代じゃないんじゃないか」とも言われましてね、急転直下それもボツになって、じゃあどうしよう。ブローチを作ろうか、等々いろいろな意見がございましたけれども、最終的にスカーフということになりました。入学式で全員に先生から記念に頂戴することになりました。このスカーフは世界に一つしかございません。若草色に染め上げ、作り上げた物なんですね。Sの花マークがはいっております。これを作っていただきました。そういうこともございまして一つ一つが先生の魂を入れて頂いたっていう感じです。じゃあこのスカーフをどうやって着けるのかということを考えて、色々な服を着てくるわけですからね。どうしたらこのスカーフが映えるのか。白のブラウスと紺か黒のスカートでなきゃってことになりまして、全員に電話をし、急遽入学式の服装が決まりました。次に先生は「入学式に歌はあるの」って聞かれるんですね。「歌は大事だ。歌を残そう」と。それならば作ろうということになったわけです。夕方になって暗くなってからでした。とにかく作ろうということで、そこにいた人、皆んなに声をかけてくださったんです。「皆んな歌詞を持ってらっしゃい」ということでした。私たちも作ったわけですが。何とこれも宿縁といいますか、うれしいことに創価大学卒業の聖教新聞社の男子記者ですよ。この記者の方が作ったのが入学式の道遥歌になったんです。先生はご覧になって「すぐ曲をつけなさい」とのことで、学園の半杭先生にお願いしました。それができましたら「じゃあ誰が歌うんだ」ということになりました。誰が歌うんだって言われましてね、誰もいない。それで「富士学生合唱団に歌ってもらいなさい」ということになりまして、当日、富士学生合唱団の方々に来ていただきました。「曲が出来たらすぐ聖教新聞に載せてあげよう」というご指示でした。「入学式の参加者は」ともお尋ねになりました。参加者と言われましても、ご父母500名 1期生373名でと思っていましたら、「そうじゃないんだ。皆よんであげなさい。素晴らしい門出なんだよ」とのことで、先生はちょうど来日されていた海外のメンバー代表200名を呼んで下さったんです。創価大学の男子学生もご招待しますよ、50名。女子学生はもちろん400名なんですけれどもね。創価学園の女子生徒さん。3年生を30名。こういうわけで、短大関係者を含めて盛大な1988名という入学式を迎えることになりました。新入生を盛大に迎えようということで、創価大学の吹奏楽部をお願いしようということになりました。こうして、とにかくどンドンと決まっていきました。

## 6. 短大開学記念祝賀会

4月3日、入学式の前の開学記念祝賀会は、白鳥体育館を使って、盛大に行われました。残念ながら創価大学落成の時には、どれほど牧口先生、戸田先生、池田先生が楽しみにされていたかわからないこの待望の祝賀会の時に、創立者のお姿がありませんでした。始まる時にはご来賓の高級車が中央体育館にバンバン着きましたけれども、創立者のご出席はありません、と申し上げた瞬間、皆さん帰られました。その姿を見て私は本当にそういうことは、二度とあつ

てはいけないと思っておりました。

ところが先生は短大のこの4月3日、二日目の4日の開学式にも両日ご出席してくださいました。そして4月3日のその最初の開学式の時に先生は私共短大関係者に「元初以来始めての短大。めでたいんだよ。お祝いなんだ。今日は天気がよかったね」と大変に喜んでくださって、「今日は大事なお客様だったんだよ。短大のために大変に貢献をして下さった寄付者の方々だったんだ。本当に来てあげてよかった」と先生は言ってくださいました。そして次の日は企業関係者トップと私大の代表、文部省関係すべて含めて1000名位のお客様でしたけれども、乾杯が終り、懇談に入った瞬間、先生はずっと名刺を配ってご挨拶を全員の方々としてくださいました。「明後年卒業致します。どうぞよろしくお願い致します」とこのように先生は一人一人に頭を下げてくださいました。この姿を拝見していて、どんな女子学生を育てなければならぬかと、本当に短大関係者は肝に銘じてこの開学を待ちました。

先生はその日、全企業の方々にご挨拶をしてくださったそのお疲れにも関わらず、短大の教員予定者とプリンセスホールで懇談をして下さいました。先生は、学生の皆さん、ご父母の皆さん、こうやってお世話になる皆さんに心を配ってくださっただけではなく、これから短大生を面倒見る最も大事な女子教育の中心である教員の皆さんにも心を配ってくださったわけです。先生は、「のびのびと新しい伝統を作っていくてください。そして家族的にやってください」とおっしゃったんです。今短大が理想的な家族的な手づくりの教育環境になっているのは、先生のお心なんですね。教員は短大教育の経験があった人ばかりじゃありません。ほとんどは四年制大学、国立大学、創価大学からいらっしゃた先生方です。四年制大学ではここまで面倒みないような、そういう面倒の見方を願う事がいっぱいありました。ですけれども、創立者の本当に打たれた手で、先生方の気持ちが創立者の示された建学の指針にむかって教職学が一体となって進む基盤ができあがったと私は思っております。先生は「私は全部任せる主義です。ただ任せて上手くいっている場合と行き詰まる場合がある。やっぱり私が来れば、来た分だけ発展していくんだ。学生も私が来れば喜んでくれる。だから度々来ます」とおっしゃってくださいました。創価大学の時には、先生はほとんどいらっしゃらない時期がございました。ここに、どれほど女子教育に対する創立者のお心があったのか。「私の最後の人生は教育です。これはそのはしりです」とおっしゃいましたね。「21世紀のための重要な課題です。そういう人材を作るのにふさわしい学校になるように私は側面から応援していきますよ。先生方は精神的には一体でやっていきましょう」このように創立者は呼びかけて下さいました。特に若い教員には創立者は本当に素晴らしいご指導をしてくださったんです。

「学者になるということはそれだけで大変であるということは私がよくわかってます。ですけれども四六時中、学校にいて、先輩の教員から学び、学生から教わるんだ」。また「学問だけではいけない。人と人との打ち合いの中で、相手は学生であっても学生から学ぶという姿勢で教員はいくべきなんだ。そうすることによって教員としての人格ができあがる」。こうして、いわゆる学生のための人間教育のあり方を、しっかりとうちこんで下さいました。やはり授業が終わるとサッサと帰っちゃう。相談したくても先生がいない、こういう現状が多い中で、創価女子短期大学の教員は、夜中までも、夜中というのは語弊がありますがけれども、例えば一つの行事を学生が遅くまでやってる、そしたらそれを見守り応援しながら残ってくださっております。この環境が人を育てている。この環境は全部創立者池田先生が手を打ってくださった環境でございます。そのようにして本当に幸せな短大生はいよいよ入学をしまります。

## 7. 第1回入学式

1985年の4月9日。ここに創立者池田大作先生と奥様をお迎えいたしまして、第一回の入学式、このスカーフを巻いた短大生は本当に私の欲目ではありません、短大関係者皆の気持ちですが、この世のものとも思えない、天女が舞い降りてきたかのような、本当に素晴らしい、清楚で美しく、知性あふれる凛々しい第一期生の姿がございました。創立者は白鳥体育館の中央から入られ、一番前列の英語科の新入生たちに、「おめでとう、おめでとう」とおっしゃって握手をしてくださって、壇上にあがってこられました。その間、奥様はずっと微笑ましく見てくださっておられました。その時の先生は「待ってたよ。君たちの来るのを心待ちにしてたんだよ」というようなお姿でございました。

第一回入学式の時に先生がおっしゃいましたことは、「第一期生として、これから高貴にして崩れざる道を、後輩のためにつくっていついていただきたい」「短期大学に学ぶ二年間という歳月は、短いといえば短い。しかし、最も大切な人生の節目であると考えれば、最も深く長い二年間と申し上げたい」ということでした。

まさに18歳、今では社会人入学とかいろいろありますけれども、18、19の方々ですので、最も人生、女性にとって大事な10代の時のこの二年間というのは非常に重要な意味がある。創立者はこのように表現されて期待をされました。

更に「この二年間に教授と学生が一体となって、四年制大学の卒業生以上の実力をつけることを、私は願望致します」。これは今有名な話になっておりますけれども、そのように先生はおっしゃいました。ですからその後先生は「理想を持ちなさい、理想のある人は強いんだ」。こうおっしゃって「そのために鍛えることが大事」だし「教養を身に付けていく事が大事」とこのように指導してくださったわけであります。とにかくこの2年間で4年分の実力をつけるということが、私共短大関係者にとっても大変な課題でございました。ですから教員の先生方は学問で、授業で必死になって取り組まれております。その中で「短大は短いから、そんなに行事は沢山やらなくてもいいけど、土曜日は授業やったほうがいいね」というお話もあったんですね。ところが幸いといいますか、授業を組む先生がいらっしゃらなかったものですから、そこを使って、全学生対象の人間教育、女性教育の場にして、短大建設・短大精神の高揚の場を作れないかと。こういうように考え、全学学年ミーティングという体制をとりました。クラスにおいては、クラス担任の先生を中心に、とにかく学生自主ではありますけれども、クラスミーティングを設け、学生同志で鍛えあう場も必要ということで、この土曜日を大いに活用いたしました。

## 8. 教養講座

2年間の先に就職はある。2年間やれば見事に一流の女性、どこにだしても恥ずかしくないそういう女性になっていくと、このように考えましてね、そして社会で活躍をされている皆さんから学ぶ場所、これが非常に大事だと思いまして教養講座を組みました。そしてその教養講座の一コマの中で、最初は創価大学を卒業してがんばってらっしゃる創価大学出身の女性先輩の方々。そしてまたある時は女性第1号の元デンマーク大使などをお迎えしました。脚本家の橋田寿賀子氏をお迎えしたり、デザイナーの植田いつ子氏をお迎えしたりと、そういう形で社会人講師をお迎えして、いち早く多くの学生の皆さんに先輩たちの姿の中から建学の精神漲る女性を目指し、自分の生きるべき道を見つけ、センスを磨き、女性としての可能性を開いて

いってくださることを心から期待しながら、土曜日を使わせて頂きました。

「どんな学生を育てるか」ということを、折々に創立者から拝聴したのですが、「品格のある、礼儀のある、頭が強く、美しく、教養のある、爽やかでセンスがいい学生を育てたい」、「福運の城、乙女の城、知性の城にしていこう」、「いい人を集めよう」と。それはそうですね。いい人というの幅が広いと思いますけれども、「他を落ちてくるような人はいらないね」と。これは厳しいお話なんですけれども、他大学を落ちてきた人は一期生にいないのかということ、いました。実はその人は、創価大学を落ちた、そして通教に通っていました。それで短大ができたから、一期生になって短大建設をするんだと馳せ参じた人がおりました。その人たちがリーダーをやってくれました。この伝統を築いてくれたんです。創立者から「選ばれて 縁深き乙女らの 元初の母と 育つを祈らむ」とお歌を前年の3月20日に頂戴を致しました。この縁も深い乙女達です。あなたたちは選ばれて来たんだ。落ちたんじゃない、選ばれて来たんだ、ということですね。過去は問わない。この短大に入ったら今日ここから誇りある短大生としてのスタートをしましょう。女性としての誇りに燃えこの短大二年間を送ろう、そういうことで、一気に新入生研修で皆さんは自分が短大に来れた事の喜びを心の底から味わって、「よし私もがんばろう」、「建設をしよう」、「創立者のおっしゃる理想の女性に育とう」、そしてまた「後輩の道を開こう」「伝統をつくろう」と言って、皆真っ直ぐに向いてがんばってくれました。ですから恋愛も途中でストップです。先生は「男とくっついているような人は退学させてもいいんだ」。厳しいですよ。「学園は男女交際は禁止なんだよ」、こうもおっしゃいました。「男はずるくて、女は馬鹿だから」。ですから本当に聡明に生きていく、そういう教育をしなければならないなと思いました。ここからは違う。ここからは創立者の娘として、私は新たな第一歩を踏み出すんだ。この決意と覚悟のない人は創価女子短期大学生にはいません、ということでスタートを致しましたけれども、誰一人やめる人はいませんでした。そういうわけで先生が仰ってくださったことで、私たちも自信を持って言い切ることができました。そして、短大に合格した学生は「一人も残さず建学の精神に立った女性に育てる！」との信念で真剣に教職員で取り組んできました。

## 9. 課外活動について

例えば4年制大学と交流という事がありますよね。典型例はクラブです。けれども、先生は「全部一切別なんだ。独立した大学でやるんだ」とおっしゃいました。「やはり先輩がたくさんいると早く大人になってしまう。そうじゃなくて、二年間でしっかりと教育をしていきなさい」。このようにもおっしゃって下さったことも大きな歯止めとなり、例えばクラブを立ち上げる時4年制大学にはもはやクラブが立ち上がっています。いつでもいけば楽器を貸してくれる。私は楽器を使いたい。泣いている短大生をそうじゃないでしょ、あなたが吹奏楽部の創立者となって作るんだ。一緒につくりましょうと言って一つ一つのクラブが立ち上がっていきました。泣く泣く、楽器は何もありませんでしたけれども、本当にそうやって建設の喜びを実感することができたのも、この創立者の楔があったからです。

短大協会の学生部研修会などで、話がでますと他の短大では部は立ち上がっていません。その方がおっしゃるには、クラブにならないそうです。責任感がないんです。皆遊びなんです。同好会とか、愛好会なんです。近くの新潟大学に、東大に、慶應に皆潜り込んでしまって、帰属意識がないんです。結局、短大というところに足場がないんです、と嘆いておられました。そういう中なのに創価女子短期大学は見事にクラブが立ち上がり、そしてその中心の部長がリ

一ダークシップをとり、またその団結が生まれ、見事にそこで人間練磨といいますか、女性の連帯が友情が築かれていきました。そのようななか、後輩たちは安心して続いていき、短大建設・クラブ建設が出来ております。つまり学生同志の中で素晴らしい人間教育がなされたな、と思っております。

先生は「しつけは厳しくね」とおっしゃいました。これは学園からの伝統でした。「挨拶一つできない女子学生ではどうするんだ」。このようにおっしゃりながら、「厳しさと優しさでいくんだよ。半々で中道でいくんだ」とアドバイスをしてくださいました。さらに「本当に短大に来てよかったと思うようにしていきなさい」と。おかげさまでこの18年間短大生は、ここにも大学に編入した方がいらっしゃいますけれども、私たちは創価短大を経て編入したからよかった。まっすぐきていたら今の私の人格はできあがっていなかったし、勉強の姿勢はなかったかもしれないと言われると、本当に嬉しいんですね。

また社会に出た短大生も私の人生はこの短大が原点です。学園から来た方もたくさんいらっしゃるので、やはり短大でよかった。最終学歴のこの最高学府で私は素晴らしい人生をおくれました。」と言って土曜日にいつでも先輩が後輩の激励に足を運んでくれています。またある卒業生ですが、こう言うんです。仕事に行き詰まった時、短大に来たいと思って、泣き泣き電車に乗って来ました。夢中で来て、どうやって来たかわかりません。でも教職員や先輩と触れ元気が出ましたと言って、「私には帰るところがある。短大に来てよかった」と言って、元気になって帰っていく。そういう空気の中にあるのも、創立者のご一念の中で育ててくださっているからだと思っています。また秘書の資格が取れるようにと、開学時から資格試験に取り組んで課外授業をして頂いております。英語科の学生が秘書一級をとって「ゼネラル石油」に入った卒業生もおりますし、数え上げればキリがありません。とにかく誇りとけじめをもって進んでいこうと。

もう一つ大事な事は、「十社千人」、十社から引く手数多の女性に育ってもらいたい。「千人の男性から」、「是非私の伴侶に」と言われる女性に育ってもらいたいという願望でした。「十社千人」という女性はどう言う女性かと考えますと、一流の基礎が出来ているということですよね。私も一期生の就職の件で色々な会社に参加しました。そのときに人事部長の皆様によりしくお願ひしますと申し上げましたけれども、創立者が開いてくださった道だからこそ、何としても勝たなければいけないと思っております。「自分たちは自信を持って、学生を育て上げました。ですけれども、社会に出ると、まだまだ至らないことばかりかもしれません。しかしうちの学生は基礎はしっかり身につけています。必ず、教育をしてくださると伸びます。是非使ってみてください。」といろいろな会社を回らせていただきました。ですから先ほども言いましたけれども、お祝儀相場でとってください、そして創立者が頼んでくださった大企業の方々が、短大生で「ここまで教育されているのか」と、こんなにも凄いということで、一部上場企業からはじまって、全部今日まで続いております。それは本当に創立者の打たれた手、そして、一期生の皆さんがこの創立者の思いを受けて、真剣に学び、鍛え、磨き上げたその結果、道なき道を開いた卒業生に、本当に感謝をしております。

## 10. 夏休みを迎えて

いよいよ前期が終わりまして夏休みに入りました。当時は、創価大学に「滝山祭」というのがございましてね、「短大は別」と言われてるから、滝山祭どうするか、と学生の皆さんも考えわけですね。そこで初めて自分たちで何が出来るかという事を考えて、夏の夕べを開催しよう



ということになりました。7月16日に、先生をお迎えしてと皆決めていました。とても先生をお迎えする状況じゃなかったのですが、自分たちは精一杯やったと言っておりました。そうしたら、はからずも白鳥体育館でアジア青年親善友好大会をやってくださることになりました。先生がいらっしゃり、アトラクションに短大生も加えて下さったんです。そしてそれが終わりましたらご自分のメインの席のそばに短大生も呼んでくださって、先生のご指導を聞かせてくださいました。全員が浴衣を着たんですが、最初に、浴衣を着ていた短大生を「綺麗だね」と褒めてくださったんですね。そういうなかでアジアの青年に向かって大事な話をされたんです。

そのご指導はこれから未来の女性の方ということで、「女性は聡明でなければいけない。恋愛も結婚も自由であり、誰にも束縛する権利はないんだ。だけれども軽薄な男女関係に陥って最も充実し、幸せになっていくべき人生を苦しみ悩んではいけない」と仰って下さりながら、「この点について戸田先生は非常に厳格でした。厳然とお話をされていたと。女性が甘い、軽率な考えで応じて、一生悩んだり悔やんだりしてはいけないんだ」と。この男女の生き方、女性の生き方、これを先生が明確に話してくださいました。本当にここで彼女達は自分たちの生きる一つの大きな価値観を先生から教えていただきました。純粹に、まっすぐにこの2年間は進んでいこうと決意しておりました。

## 11. 白鳥祭

そしてそれが終って二日後ですね。急遽ではありましたが、先生と奥様が本部の近くで懇談会を持ってくださいました。先生が短大生が半年経ってどうなっているか、非常に心配をされたんだと思います。懇談のなかで、学生生活のこと、授業のこと、悩んでいること、不満なこと、先生は一つ一つ丁寧に聞いてくださって、しっかりと指導をしてくださり、課題を与えてくださいました。まさに厳しくも楽しい、そして素晴らしい原点になっております。そこで、「短大は何かやるのか？」というお話になりまして、短大祭をやりたいと思います、と。そうしましたら、「名前は？」と聞かれ、まだありませんとお答えしますと、「白鳥祭だな」って仰ってくださって、そこで決まり、白鳥祭を11月4日にやろうとこういうことになりました。先生は大変楽しみにしてくださいまして、「大事だ。この白鳥祭が一つの勝負だな」というようなことで、「一期生だからいろいろと不便な事、苦勞する事、長女だから一杯あると思うよ。だけれども後輩の為にがんばってほしい。そして素晴らしい伝統をつくっていきなさい。意味のあるもので、短大生らしいものをね。人の真似はいけないよ。短大生らしいものにしていきなさい」。ここでも先生は魂を打ち込んでくださいました。後日、実行委員長に「誉れある 短大一期の 君ら立て 歴史を創りて 歴史を残せと」の御歌を色紙に揮毫していただきました。

お蔭様で全員参加の見事な大成功の第1回白鳥祭を創り上げました。最後は自分たちは将来このように勝利していきますということで、未来の自分たちの姿で凱旋門をくぐって、自分の理想の姿を表現しておりました。本当にこんなにも素晴らしい、女性の手でここまで感性のある美しい、大きな大きな理想を秘めたという白鳥祭ができあがったわけです。

しかし、残念ながら当日は先生のご出席はありませんでした。「見守っているよ」と仰ってくださって、見守って頂きながらの第一回白鳥祭になりました。

しかし、12月6日に創始者は、授業参観にきてくださいました。大教室の後から入って下さったのですけれども、後半分は先生が通られる所が見えるのですけれども、前半分は見えない、誰も気が付かない。真剣に授業を聞いてましたね。そういう空気の中を先生はスーッと回っ

てくださいました。勿論今回のようなお講義はありませんでしたけれども、そのようにして先生は学生の皆さんとの約束を見事に果たしてくださいました。

翌年の第2回白鳥祭は御出席くださいました。先生は白鳥祭記念フェスティバル終了後「女性に勝ったよ。男性なんてかなわないよ」こうおっしゃって、本当に喜んでくださったんですね。「素晴らしい。この17年間で最高だった」、こういうふうに褒め称えてくださって、短大生に自信を与えてくださったんです。とにかく「成長した。満点だ」。

そして第3回にも先生・奥様はご出席してくださいました。校内展示を見て廻られ、学生の要望に応え、色紙に「心より広い宇宙はない」と御揮毫してくださいました。そのように創立者・奥様に見守って頂きながら、先生の温かい呼吸、息づかいを感じながら、学生の皆さんはこの2年間で4年分の実力を備える学問と、そして人間練磨のこの二つの車輪を同じ大きさに鍛え上げながら、見事に成長していってくれました。

## 12. 第2回入学式

第2回入学式では、1期生は自分たちは道なき道を開いた。その苦労を後輩にはあまりさせたくない。この妹たちのために私たちができることは、何でもしてあげたいと、後輩を迎える短大1期生の心として『妹へ』という歌をつくりました。こうした姉たちの素晴らしい思いに包まれて2期生は入学をして参りましたので、このへんから姉妹の絆というんでしょうか、短大生の先輩が後輩を思い、後輩が先輩を尊敬するという姿ができあがってきたように思います。

## 13. 記念撮影会

第2回入学式には創立者のご出席がなかったこともあり、突然5月22日に先生は記念撮影をしてくださいました。これが創価女子短期大学の第1回の記念撮影会で、以来今日までの歴史になっております。先生は「急に短大にお邪魔したのは、是非っていう声があったので、今日は来させて頂きました。教員の先生方には本当にいつもありがとうございます。お世話になっております。私の娘達を今後ともよろしく願います」と丁寧に挨拶をされながら、ご自分は青春時代には本当に経済的、健康的な理由で順調に教育が受けられなかった。ですから戸田先生の戸田大学で私は十年間薫陶を受けたという話を通して「学べるということがどれほど素晴らしい事か。皆さんの学ぶ特権を大いに発揮して学んで頂きたい」ということで、先生はここでも短大生に青春の心、教養の心、知性の心を教えられ、しっかりと勉強しておかないと大人になって、母親になって笑われて敗北者になってしまうよと、このようにもおっしゃってくださいました。

## 14. 第1回卒業式

そのようにして2期生を迎え、いよいよ短大1期生が卒業する完成年次になりました。この1期生の卒業式には「謝恩会に出てあげるから」とおっしゃってください、卒業式は見守ってくださいました。沢山表彰してあげなさい、とのことで創立者賞1名、私たちは是非「香峰賞」もとお願いし、英語科、経営科各1名ずつ最優秀者を表彰。もう一つは「白鳥賞」。これは短大建設に貢献のあった人へのものです。本当に地道に、学問をやりクラブをやりゼミをやり、アルバイトをやり、いろいろなことをやりながらも、短大建設の為に、自分を後輩の為に伝統を築き上げた人や、また、往復かけて5時間という中を無遅刻無欠席できている学生もおりました。

た。そういう色々な角度で顕彰ということで、白鳥賞10名もお願いを致しました。そして全員には創立者から卒業記念の御揮毫の色紙を頂きました。

こうして第1回卒業式は、先生・奥様の心に見守られ無事に終了し、謝恩会に入りました。先生も奥様も大変に喜んでくださって、「本当に成長した。美しい。宝塚の卒業式よりも何百倍も素晴らしい。英知と華麗さで。本当に嬉しい」とおっしゃってくださって、先生は彼女達の成長の姿、そして誇らかな晴れ晴れとした輝く卒業の姿を心から喜んでくださいました。彼女たちは創立者奥様に送られながら、社会で勝って後輩の道を開き、短大を作ってくくださった創立者にお応えしたいとの決意で見事に卒業していきました。

## 15. 卒業生の活躍

そのようななか、先ほどもお話を致しましたが、卒業生は現在まであらゆる所でがんばっております。先日、10月1日に幸せにも創立者池田先生が短大にお越しくださいまして、お講義をしてくださいました。その冒頭で「みなさんは短大を選んで賢明でした。創価の卒業生は皆信頼があって素晴らしいんだけど、短大の卒業生は、最高峰です」。このようにお褒めの言葉を頂きました。このことがすぐさま日本列島に伝わり、後輩の道をと歯を食いしばって頑張ってくれた先輩達も心から喜び、先生にすぐお礼のお手紙を差し上げた人たちもおります。

卒業生の活躍の一端を紹介しますと、四国の建設会社に一般事務で採用を勝ち取った卒業生が現場監督にいきなりなっちゃったんですね。それで建築のけの字も知らない。彼女はまず現場のおっちゃんたちにどうしたら信用されるか、勉強しながら、何ができるかと考えて、まずトイレをキレイにした。一番汚い所を一番きれいにして皆に気持ちよく働いてもらおう。そういうことから始めて、がんばってきて、それを労働省で当時募集した「建設業に働く若者からのメッセージ」に投稿し、それが入選しまして、労働大臣賞を受賞したんです。彼女は若き女性のリーダーとしてもがんばっていて、現在は2級建築士をとり、1級建築士もとろう。そして発展途上国に行って家を建ててあげたい、こういう希望に燃えております。また、大手建設会社に入った卒業生も2級建築士をとって、名古屋駅の20世紀最大といわれるツインタワービル的设计にもたずさわったという仕事で信頼を勝ちとっております。海外で雄飛している卒業生も沢山になりました。時間の関係でご紹介できないのが残念ですが。

## 16. おわりに

創立者池田先生が先日も来てくださった時に、そこにたまたま授業に参加しなければいけない学生が遅刻して間に合わなかった、ということがございました。泣いて私のところに来ましたけれども、「あなたは今まで無遅刻無欠席だったの?」と聞いたら「違います」「だったら今日からどうするの?」と言ったら「今日から決意を新たにして絶対に遅刻はしません」「そうでしょう。そのあなたの生命を耕すために創立者はいらっしゃってくださったんじゃない。あなたのためにいらっしゃったのよ」と。私も心の底からそういうように思うんですね。先生はこの記念撮影といい何といい、そこに集ってきている全員の心を全部見えて激励をしてくださっているんです。そこでそうやって一人一人の生命を耕してくださっている。これこそが私は本当に真の教育だろうと思っております。こうして育てていただいた短大の歴史が今日に至っております、今では国立大学をけて、創価大学の二つの学部をけて、どうしても短大に入りたい。それは先輩の姿を見て、先輩のその真心に触れて、どうしても短大生になりたいとい

って来るような、偏差値も人間値も高い学生さんが入学しております。このたびの創立者池田先生のご来学で21世紀の新しい原点を作っていただきました。この先創価女子短大生がどれほどの活躍をするか、心から敬意を表して今日は終わらせていただきたいと思います。大変にありがとうございました。